2026 年度「看護記録研修」アンケート結果報告書

集計日：2026 年 10 月 3 日

回答者数：28 名

1. 総括

- 研修内容について「よく理解できた」または「理解できた」と回答した人は 26 名（92.9%）であった。
- 「今後の実践に役立つ」または「おおいに役立つ」と回答した人も 26 名（92.9%）であり、研修内容の理解と実践への有用性が同程度に高く評価された。
- 自由記述では、具体的な記録事例、記録の書き方、スタッフへの指導、電子カルテ・AI・ICT・医療 DX など、実務に直結するテーマへの要望が多くみられた。
- 以上から、次回研修では「看護記録の考え方」に加え、実際の記録例を用いた演習・添削など、現場で再現できる内容へ発展させることが期待される。

2. 回答者の属性

回答者は 28 名で、全員が看護師、全員が病院勤務であった。看護連盟会員は 20 名（71.4%）、非会員は 8 名（28.6%）であった。

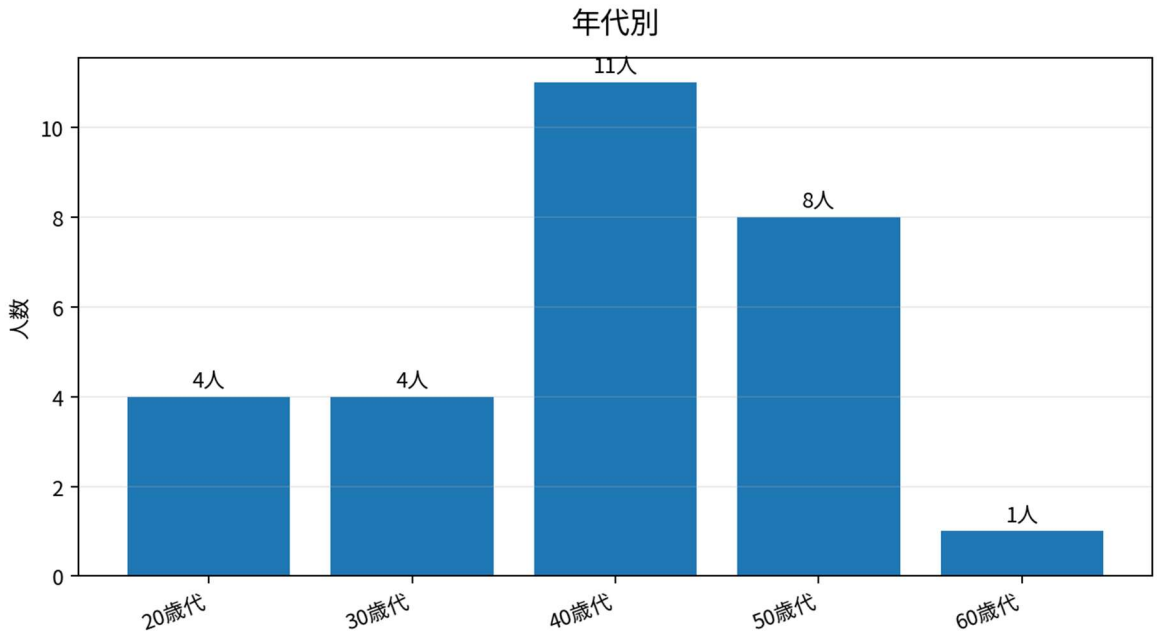


図 1　年代別構成

【分析】40 歳代が 11 名（39.3%）で最も多く、40〜50 歳代を合わせると 19 名（67.9%）。中堅・管理職層の視点が比較的強く反映された回答構成である。

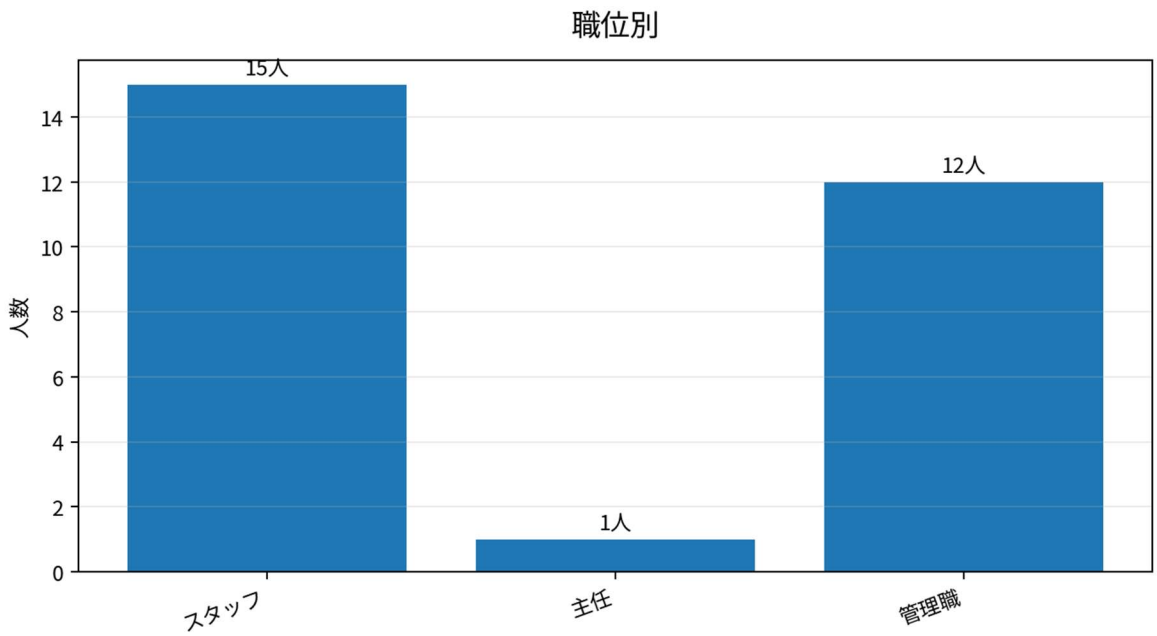


図 2 職位別構成

【分析】スタッフ 15 名、管理職 12 名、主任 1 名。スタッフと管理職の双方から評価が得られている。

3. 研修への参加動機

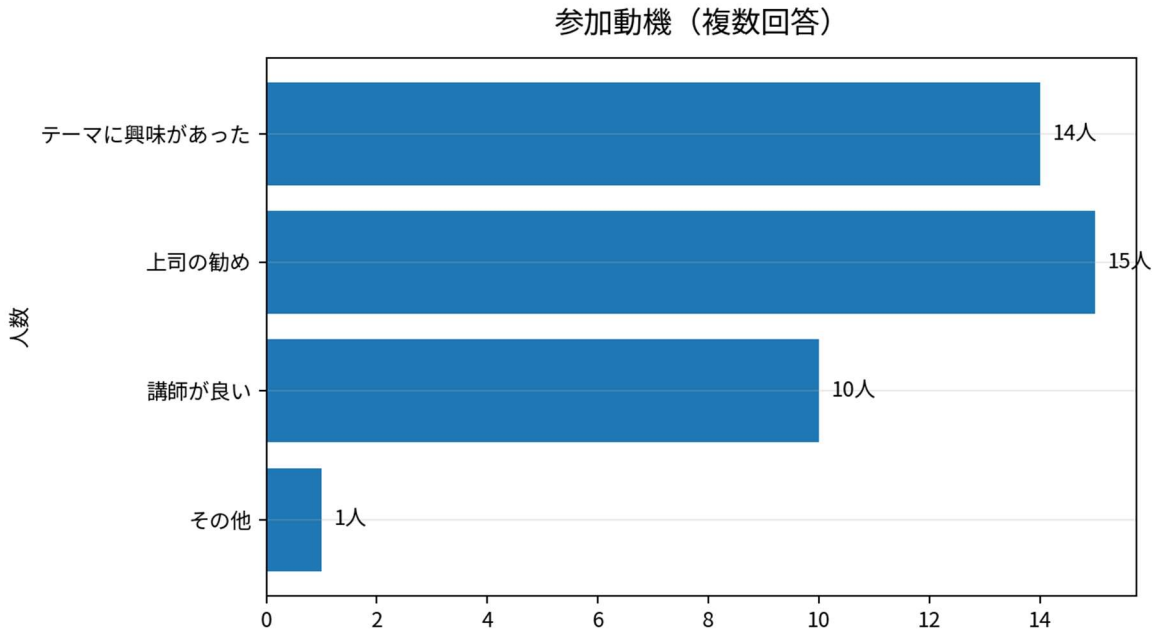


図 3 参加動機（複数回答）

【分析】「テーマに興味があった」が 14 名（50.0%）で最多。「上司の勧め」は 10 名（35.7%）、「講師が良いから」は 10 名（35.7%）。テーマ自体への関心が高く、研修内容へのニーズが明確である。

4. 研修内容の理解度

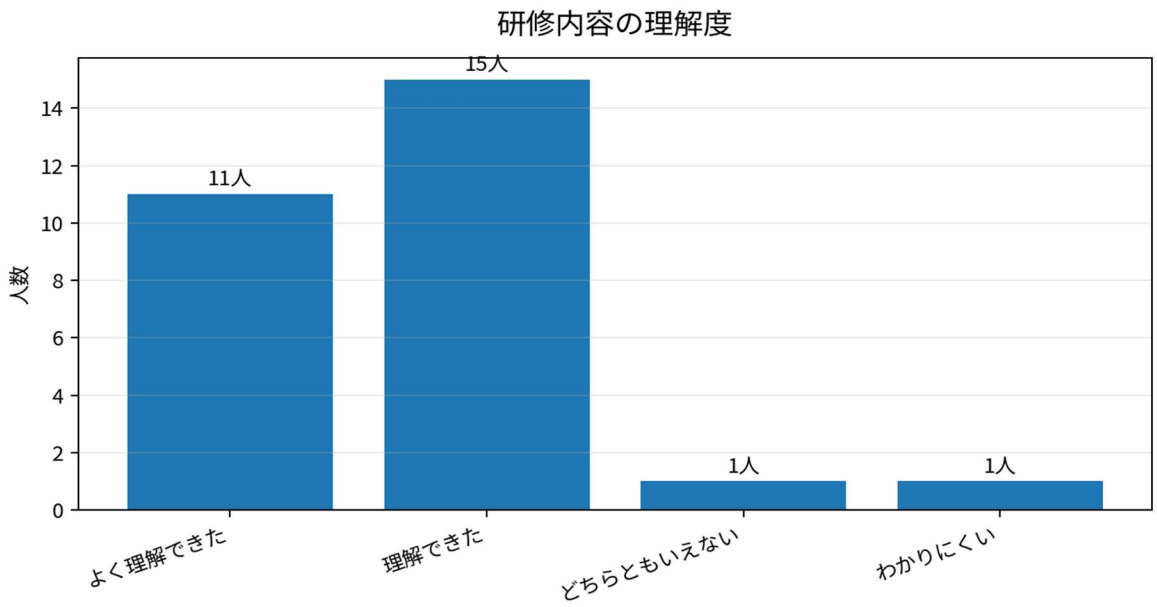


図 4 研修内容の理解度

【分析】「よく理解できた」11 名＋「理解できた」15 名＝26 名（92.9%）。一方、2 名は中立または理解しにくい部分があり、日常業務との接続をさらに強める余地がある。

5. 今後の実践への有用性

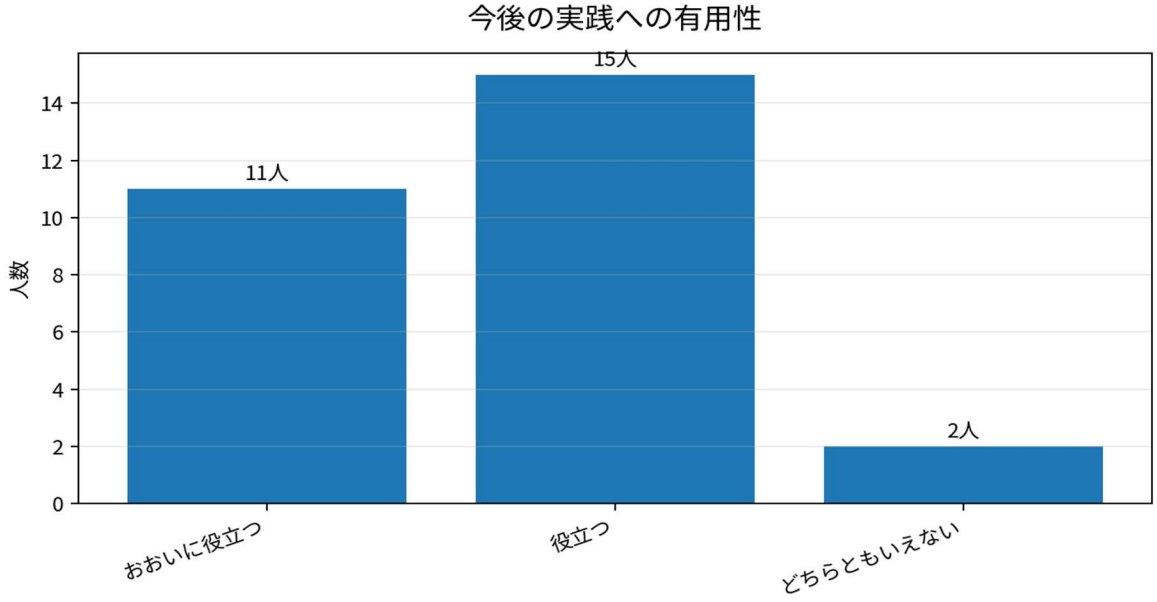


図 5 研修の実践への有用性

【分析】「おおいに役立つ」11 名＋「役立つ」15 名＝26 名（92.9%）。「おおいに役立つ」だけでも 39.3%であり、実務への波及が期待できる高い評価である。

6. 自由記述からみた主な成果・課題

自由記述では、次のような成果が確認された。

- 「誰の」「何のための」記録なのかを再認識できた。

- 自分が記入している記録を見直すきっかけになった。
- 看護サマリーやフォーカス記録等の見直しにつながった。
- AI・ICT・電子カルテ・医療 DX など、今後の看護記録を考えるきっかけになった。

一方、今後の課題として「実際の記録例がほしい」「良い記録・誤った記録を比較したい」「看護問題・看護計画の具体的な書き方を知りたい」「新人・スタッフへの指導方法を学びたい」などの意見がみられた。

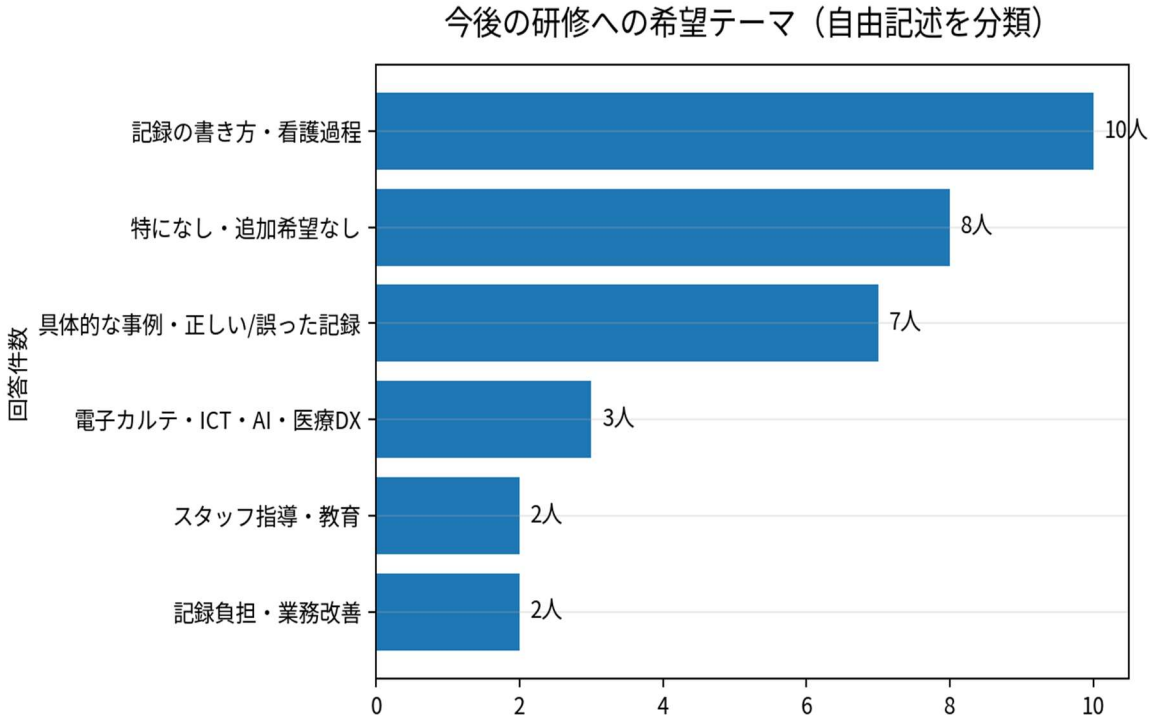


図 6 今後の研修への希望テーマ（自由記述を内容別に分類）

【分析】自由記述は複数テーマにまたがる回答があるため、1 回答を複数カテゴリーに分類している。特に「具体的な事例」「記録の書き方・看護過程」「電子カルテ・ICT・AI・医療 DX」に関する要望が目立つ。

7. 看護職国会議員の認知度

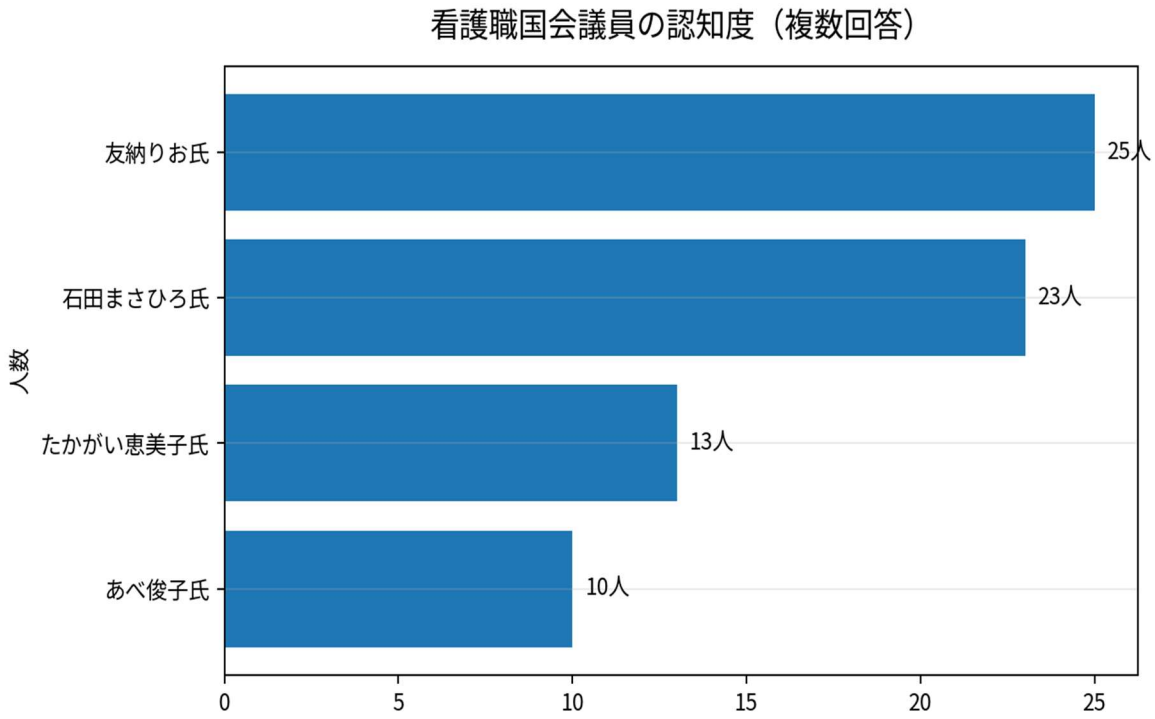


図 7 看護職国会議員の認知度（複数回答）

【分析】今回の研修参加者 28 名における認知状況であり、看護職全体の認知度を示すものではない。友納りお氏 25 名（89.3%）、石田まさひろ氏 23 名（82.1%）、たかがい恵美子氏 13 名（46.4%）、あべ俊子氏 10 名（35.7%）であった。

8. 次回研修への提案

1. ① 実際の看護記録を用いた「良い記録・改善が必要な記録」の比較
2. ② 看護問題・看護計画・個別性のある記録の書き方
3. ③ SOAP・FDAR・フォーカスチャーティング等の使い分け
4. ④ 新人・スタッフへの記録指導方法
5. ⑤ 電子カルテ入力、AI・音声入力、ICT・医療 DX と看護記録
6. ⑥ 記録時間・業務負担を減らしながら質を確保する方法

9. 結論

本研修は、理解度・実践への有用性ともに 26 名（92.9%）が肯定的に評価しており、研修の目的は概ね達成されたと考えられる。今後は、今回得られた高い評価を基盤として、具体的な記録事例や演習を取り入れ、参加者が研修後に自施設の看護記録を改善できる内容へ発展させることが望ましい。